

## 第2回 東南置賜地区の県立高校の再編整備に係る検討委員会 記録要旨

- 1 日時 平成29年9月1日(金) 14:00~16:00
- 2 会場 置賜総合支庁 講堂
- 3 参加者 委員 安部昌枝、井上清人、大森桂、金谷茂寿、清川千賀子  
白石美保子、須賀一好、清野一晴、高橋まゆみ  
山口周治、吉澤彰浩、和田廣(五十音順、敬称略)  
※鈴木慈委員は欠席
- 事務局 津田教育次長  
須貝高校改革推進室長、伊藤高校改革推進室室長補佐  
小野高校改革主査、奥山高校改革主査

### 4 内容

- (1) 県教育委員会あいさつ
- (2) 検討委員の紹介
- (3) 説明・報告
  - ① 第1回検討委員会の論点整理について
  - ② 高校教育に関するアンケート結果について
  - ③ 地域関係者からの意見聴取の結果について
- (4) 協議
  - ① 東南置賜地区の実情を踏まえた高校教育の条件整備
    - ア 必要とされる学科・コース・教育内容について
    - イ 望ましい学校規模の確保について
    - ウ その他の教育条件の整備について
  - ② その他

### 5 発言要旨

- (4) 協議
  - ① これからの東南置賜地区の高校教育に求められるもの
    - ア 必要とされる学科・コース・教育内容について  
(委員)
      - 中学校3年生へのアンケートの結果から、約3分の2の生徒が普通科への進学を希望していることがわかる。普通科への志望の動機は、高校卒業後の進学を考えているためと思われるが、普通科高校は、ただ単に大学進学するための予備校のようなものになってはいけない。高校はモラトリアムの期間ではない。
      - 県外に進学した生徒が、大学卒業後に地元に戻って来るのだろうかということがアンケート結果から読み取れ、非常にもったいない印象を受ける。普通科のニーズが高ければ、生徒が地元に対して役に立ちたいと思うような教育プログラムがもっとあってもよい。地元の高校を卒業後、都市圏の有名大学に入学し、一流企業に就職することはかなり困難であると思われるが、目指す生徒がいてもよい。ただ、県外の大学を卒業後も、地元に戻るきっかけづくりとなるコースがあるとよい。
    - (委員)
      - 普通科希望が多い理由は、普通科に進学したいという積極的なものではなく、保護者・生徒ともに将来の希望や就きたい職業も決まっていないために、とりあえず大学進

学もできる普通科を選んでいるという消極的なものもあるのではないか。

- 私が進学した工業系の大学には、普通科高校出身の学生だけでなく、工業高校から進学する学生や、高等専門学校から編入してくる学生もいた。普通科以外から進学してきた学生は、高校時代に専門的な勉強を積んできていることもあり、普通科から進学してきた学生より成績が良い学生が多く、優良企業に就職している学生もいた。いい会社に就職するためには、いい大学に行かなければならないというイメージを、生徒・保護者ともに持っていることが問題である。専門学科の高校からも希望する大学に行くことが可能であり、希望の会社に就職することができることを、もっと生徒・保護者に知ってもらうことが必要である。
- 山形県や置賜地区として、どのような人材を育成すべきかの方針がないと、再編整備においてどのような学科や学校規模が求められるのかの議論にならない。例えば、就職希望の高校生が少ないという結果が出ているが、置賜地区の工業地域に就職する生徒を増やすべきであれば、工業科の定員を増やす方向で再編していくべきである。当然、高校側も中学生へのアピールを十分にしなければならない。この高校は何人、この学科は何人といった、中学生に進学して欲しい人数の目標を持って再編整備がなされなければならない。

(委員)

- 置賜地区にも体育科があってもよいのではないか。スポーツなどで生徒の長所・特徴を生かせるコースがあってもよい。

(委員)

- 山形県の食料自給率はカロリーベースで全国3位と高い。少子高齢化が進んでいく中、食料自給率は重要な視点であり、今後、食料生産や加工は、若者が担っていかなければならないものとする。農業科と山辺高校食物科のような食物、家庭を学べる学科を括って、作物をつくることから、加工、調理までを総合的に学ぶことができるコース・学科がつかれないか。
- 専門学科は、専門的な知識・技術を身に付けることが大事であるが、ニーズが高い普通科においては、基礎学力を十分に身に付けることが大事である。
- 海外志向の生徒でも、英語の力よりも前に、日本語の力を身に付けさせることが重要である。これからは、海外で働く場面が多くなると思われるが、その際に日本文化についてきちんと説明できる人材を育成すべきである。

(委員)

- 高校は、生徒のニーズに応じて、定員を確保すべきである。
- 中学生にとって幅広い選択肢がある現在の状況を維持して欲しい。
- 高校受検が近くなると、本人の希望だけでなく、家庭の経済的な理由や本人の能力を考えて、最終的に受検する高校を変更するケースも多い。アンケート結果も、第1志望よりも第2希望の志望が実態に合っているのではないか。
- コース・学科は、時代に応じて変化している。今後も、より時代の要請を反映させた学科・コースの編成をして欲しい。

(委員)

- 総合学科はどのような現状になっているのか。

(事務局)

- 従来は、普通科と専門学科だけであったが、普通科目と専門科目を総合的に選択できる第3の学科として新たに総合学科が生まれた。東南置賜地区では、平成16年度に高島高校が普通科から総合学科に学科改編している。総合学科では、系統性や科目選択の目安として、学校の特色に応じて系列が設定されており、高島高校には、地域環境、観光文化、福祉共生、知性独創の4つの系列がある。生徒は、系列を選び、その系列にあった科目を選択して学習することになる。総合学科では、県全体では現在8校に設置され

ている。

(委員)

- 置賜地区では、工業科だけでなく、農業科も大事にしなければならない。特色のある高校をつくる際は、基礎学力もあり更に専門性もあるスペシャリストを育成する教育に期待している。
- 大学入試のスタイルは毎年変化している。大学側も、AO入試などで特色のある生徒を受け入れられるような仕組みをもっと整えていくべきである。
- かなり動揺があるかもしれないが、思い切った再編整備を行うべきであると考えている。

(委員)

- 生徒のニーズに答えるだけではいけない。社会が目まぐるしく変わっている時代であるが、生徒は知識が十分にあるとは言えないので、しっかり教えていく必要がある。
- 少子化や人口減少が進んでいるが、これを食い止めなければ、企業や商店の経営も成り立たなくなり、地域の経済は衰退してしまう。高校では、地元に残ること、地元にも就職先があること、大学に行かなくとも就職できることなどについてしっかり教える必要がある。
- 企業にとって、高校でどんな学科で学んできたのかは、あまり問題ではない。正しい考え方をもって、一生懸命頑張る姿勢が大切である。人間として生きていく中で必要な生きる力や正しい考え方をしっかり教えて欲しい。
- 忍耐力が身に付いており、挨拶・掃除がきちんとできるため、企業ではスポーツ経験者を採用する傾向がある。
- 高校程度の専門性が必ずしも役に立っているとは言えないが、大学に進み、専門的に学習して身に付けた知識・技術は、就職後に非常に役に立っている。

(委員)

- 米沢は、ものづくりの企業が多いため、工業科が必要であるという短絡的な話になりがちである。
- 工業・農業の基礎的な部分や知識をしっかり学ぶことは必要であるが、産業高校のように工業・農業・商業など複数分野の知識を得ることができ、その知識を組み合わせる新たなことを学ぶことができるような新たな高校も必要である。
- 6次産業化を意識して、生産するだけでなくサービス業も含め、マーケティングや販売までを総合的に学ぶことができる学校づくりが求められる。
- 医師不足・看護師不足が問題になっている。医学部や難関大学を目指すことが可能である探究科も重要と考える。

(委員)

- 職業学科でも新しい内容に変えていく必要がある。他の地区では既に設置されているが、食・農・工を関連させ、融合した分野を学ぶことができるような新たな高校も必要である。

(委員)

- 生徒・保護者ともに、高校卒業後進学するには、普通科に進学しなければならないという漠然とした意識があるのではないか。
- 子どもにはできれば進学して欲しい、良い条件の企業に就職して欲しいといった親の希望が、地元に残って就職することには繋がっていない。
- ものづくりの農業や工業は、人材づくりや地域づくりにも繋がっており、大切なことであることを子ども達も知って欲しい。
- 大学への進学などにより、都市部に生徒が流出してしまい、今の状況が続けば地域に子どもがいなくなってしまう。親は戻ってきて欲しいと思っているが、子どもが希望する就職先がない現実がある。
- 高校は、働くということがどういうことか、ものづくりはどのようなものなのかのピ

ジョンを教えられる場であって欲しい。

- いろいろな分野に興味・関心をもつことができ、より深く学べる進路を自分で選ぶことができる総合学科は良い仕組みである。

(委員)

- 新たな学科・コースをつくる際は、再編統合は必要である。また、生徒・保護者にとって理解しやすく、目的のはっきりした学科・コースをつくって欲しい。
- 時代にあわせた学科も必要であるが、将来、子どもが地元に残り、地域の活性化を担う人材を育てるコースも必要である。

(委員)

- 普通科への進学希望が多いのは、中学生の段階では将来就きたい職業を決めるのは難しいからではないか。
- 置賜地区には、普通科、工業科、農業科、商業科、総合学科など選択肢が多く恵まれている。
- 専門学科や総合学科は学区の制限がなく、将来の進路がある程度決まっている生徒の中には、置賜地区から山形市内の高校に進学している者もいる。地元に残って欲しい気持ちはあるが、生徒の希望する高校を自由に選べるよう、学区制の廃止または学区の再編を見据えながら学科を検討する必要がある。

(委員)

- 現代の農業は、大規模化、法人化、株式会社化が進んでいる。農業経営をする上で、農業の知識だけではなく、経営に関する知識も必要であるため、商業科で学んだ方がよいのではないかと思うこともある。置賜地区の有名な農家は、農業高校出身者もいるが、農林大学校に進学したり、日本農業経営大学校で経営の勉強をしたりしている。高校進学の際に、消極的な選択で農業科を選択し、中途半端な気持ちで卒業しても専業農家でやっていける実力は身に付かない。
- 高校名に「農業高校」などの専門的分野の名前がついている高校では、卒業後の就職先が限定されてしまうイメージがあるため、希望する生徒が少なくなっている。
- 中学校3年生では、自分の興味ある分野や将来の職業を決めることが難しい。将来幅広く職業を選択できるイメージを持たせるため、高校入学の際は総合学科のような間口の広いものにして、入学後に興味ある分野を選択出来る仕組みがよい。

(委員)

- 工業科、商業科、農業科などの専門学科は、昔のイメージに固執せず、進学にも対応出来る、進路選択のためのキャリア教育にも力を入れる学科に改編していかなければならない。同様に、普通科も変わっていく必要がある。

## イ 望ましい学校規模の確保について

(委員)

- ある程度の学校規模は必要であると考えます。
- 小規模校では、きめ細やかな指導や支援がしやすいメリットがあるが、教員の数がそれに伴い少なくなる。学校の規模にかかわらず、学校がすべきことは変わらないため、小規模校では教員の負担が大きくなってしまふ。また、部活動数を維持するのが困難となり活動も制限されてしまふ。加えて、生徒同士の切磋琢磨の機会が少なくなり、人間関係がこじれた場合の逃げ場がなくなる可能性もある。

(委員)

- 小規模校なりの良さはあるが、教員配置、部活動、生徒同士の競い合う環境づくりの面からみて、高校は1学年5～6学級が適当と考える。
- 高畠高校は1学年3学級の総合学科高校であるが、3学級でのメリット、デメリットなどがあれば教えて欲しい。

(事務局)

- 総合学科の特色は、多種多様な選択科目の中から、自分で学びたい科目を考えて選択出来ることにある。自分の将来像を思い描いて、科目選択を考えていくことになる。大規模校であれば、様々な専門科目が設定でき生徒の選択の幅も広がるなどより、メリットが大きい。小規模でも生徒の実態を踏まえて適切な選択構成にしている。

(委員)

- 総合学科の設置校として、西置賜地区に1学年2学級規模の荒砥高校があるが、その設置の経緯を教えて欲しい。

(事務局)

- 荒砥高校は平成25年度に普通科から総合学科に学科改編した。学校規模がより大きい方が総合学科としてのメリットがあるものの、進学する生徒も就職する生徒もいるという多様な生徒の実態を考慮して、2学級ではあるが総合学科を設置した。

(委員)

- 米沢市内の高校規模は私の想定より2～3学級小さい。部活動や人間関係の面から考えても、1学年5～6学級の規模、250名～300名の生徒数がいてもよいのではないか。現状として、1学年当たりの人数が中学校より少なく、高校の方が狭いコミュニティーになっているため、生活のしづらさを感じている生徒もいるようだ。

(委員)

- 今後の少子化を考えると、高校の統合はやむを得ない。
- 定員割れをしない程度に定員を減らしていった場合には、小規模校の維持は難しくなる。一方、定員割れのままにしておけば、競争が無く、中学校卒業生全員が高校に入学できるような状況になる。その場合、中学生は勉強しなくなり基礎学力の低下を招くと考えられる。
- 現在あるコース・学科は維持しながらも、高校を統合して、酒田光陵高校のような総合選択制の高校もあってもよいのではないか。
- 私立高校とのバランスも考えなければならない。

(委員)

- 生徒同士が切磋琢磨できる環境づくりのためにも、ある程度の学校規模は必要である。
- 地域活性化やまちのにぎわいづくりの観点から、地域から求められているのであれば、地域に根ざした小規模の高校も必要なのではないか。
- 再編整備を進める際は、地域の声をよく聞きながら進める必要がある。

ウ その他の教育条件の整備について

(委員)

- 高校は、駅からも近く交通の便が良く、広い敷地があり近隣に迷惑をかけない場所への立地が理想的である。ある高校は、閑静な住宅地にあるが、市街地に近く交通量が多い道路に接している。そのため、体育の授業、部活動による騒音、学校周辺の交通渋滞などの問題がある。一方、別の郊外にある高校は、夏場は駅から自転車や徒歩で通学できるが、冬季の通学は不便であるものの、敷地面積が広く、野球場1面・ソフトボール場1面・硬式テニスコート5面等が取れ、近隣への騒音を気にせずに部活動などをすることが出来るなど、環境的に恵まれている。

(委員)

- 統合した場合の新たな高校の立地場所は、まちの中心部にして欲しい。観光客と高校生とが触れ合える場がなく、観光客からは若い人がいないまちと言われることがある。また、冬期間の郊外にある高校への通学には送迎が不可欠であり、親の負担が大きい。

(委員)

- 新しい高校は、まちの中心部での立地が望ましいことは理解できる。しかし、現実的

に考えれば、米沢市の中心部には高校を建てることができる広大な敷地がない。

- 米沢工業高校、米沢興譲館高校への送迎が大変であるが、学校の最寄りの駅からシャトルバスを運行させるなど、アクセスの充実を図り、子ども達だけで通学でき、送迎の負担を減らす方法は考えられないか。今後もあの立派な学校を活用していかなければならないということもある。

(委員)

- 公共交通機関の運賃が高いため、送迎している保護者もいる。また、米沢興譲館高校には冬期間は親の送迎に頼らないと通えない現状である。スクールバスやシャトルバスを運行するなど、送迎の負担軽減について考えなければならない。
- 暑い中、我慢して勉強する時代ではない。クーラーは整備しなければならない教育条件と考える。

(委員)

- ICT環境も求められている。

(委員)

- まちの中心部にある高校や、保育園や小学校は敷地が狭い。子どもにとって広々とした環境が必要であるのではないか。
- 我慢することも教えなければならないとは思いますが、冷暖房設備はしっかり設置して欲しい。

(委員)

- 新たな高校を建てるときは、商業施設、高校、体育施設などを1か所に集積させ、駅からのシャトルバスなども整備された学園都市の考えが必要である。
- 高校は自由で、青春を楽しむ場所であって欲しい。勉強も大切であるが、恋愛もして欲しい。